二〇一二年一月一四日

掌に転ばせてをる竜の玉　よし女
窯火守り昔語りや炭焼女　うつぎ
初旅のバッグに新の俳句帳　はく子
炭をつぐ僧侶なかなか俳句通　有香
端正に榾切り揃へ炭を焼く　雅流
クレソンのまみどり畠の寒の水　とろうち
冬帽子もて香煙を集めけり　なつき
切りのなき昔語りや炭焼女　よし子
太鼓高鳴りて佳境やとんどの火　ともえ
左右たがひ擦り励ます悴む手　三刀

二〇一二年一月一三日

日向ぼこ兼ねて漁網を繕へる　せいじ
奴凧子らの声援得て元気　うつぎ
木枯らしの音の間遠に救急車　よし子
日短目当ての饅頭売切れに　きづな
初句会花びら餅に和みけり　雅流
大鳥居垂らす氷柱数知れず　花茗荷
喝采のごとく飛び翔つ冬かもめ　よし女

二〇一二年一月一二日

炭焼きの窯の炎が憑きにけり　よし子
図書館の席といふ席受験生　つくし
天井の日を吸ふてをる冬の蝿　とろうち
月光を弾きて尖る軒氷柱　花茗荷
炭窯の罅に滲める炎かな　雅流
葦の間を迷路のごとく鴉泳ぐ　菜々
初釜やしびれに裾の崩れけり　なつき
旅の吾に初凪ぐ海や須磨明石　百合

二〇一二年一月一一日

高楼に冬晴れの海展けけり　ひかり
球足の綾なす霜のグリーンかな　宏虎
括られて畑の白菜地蔵めく　よし子
渋滞の路肩に凛と水仙花　つくし
冬田道四囲の稜線途切れなく　とろうち
わが吐息触れむ咫尺に寒牡丹　うつぎ
ケンケンの丸の大小路地の春　有香
わが庵の鏡開きはパック入り　満天
買初のセール我が物真っ先に　せいじ
山茶花の紅に野趣あり深山道　つくし
奥宮へ詣で賜はる残り福　雅流

二〇一二年一月一〇日

迷路めく屋台をぬけて初戎　花茗荷
北国の闇を一擲冬の雷　ぽんこ
雑草に煌めくはなに片時雨　有香
一筋の紅引くごとく寒夕焼　百合
戎笹を両手に抱きて大男　ひかり
寒風が頬撫づ岬の露天の湯　きづな
風邪に臥しカーテンの日を恋ひにけり　せいじ
著き黄の見ゆはなぞへの野水仙　はく子
寒鯉の動くともなく向き変ふる　とろうち
寒林や機影追ふごと音過ぎる　つくし
どんどの火背なにぺちゃくちゃ女どち　治男
福笹を持ち笑み交はす老父婦　はく子
枯蓮の枯れをつくして立ちつくす　菜々

二〇一二年一月九日

黒潮の風に色づくみかん山　雅流
ひと摘みで足る偕老の薺粥　なつき
ポケットの小銭を賽に初詣　ひかり
日溜りに玉の莟や寒椿　つくし
この齢なれどときめく初神籤　とろうち
放水の跡匂ひ立つ出初め式　三刀
己が身の邪を払はんと弓始め　菜々

二〇一二年一月八日

断崖を打つ波音や冬の月　こすもす
山も田も満目雪の故郷かな　満天
和太鼓の打ち響きたる寒美空